

生活者の視点から考える中国政治

総合政策学部 准教授 鄭浩瀾

ここ数年、中国を訪れるたびに、社会の変化に驚かされる。1990年の上海では地下鉄が1本もなかったが、いまでは16本も敷設されている。上海だけでなく、内陸地方にも建設ラッシュが続いている。電子決済の普及速度も日本では考えられないほど速い。ウィチャット・ペイ (WeChat Pay) のような電子マネーは、チェーン店やコンビニだけでなく、屋台や個人間の決済にも使える。それに加えてネット通販が広がり、消費活動に日常の大半を費やす市民が増えている。市民の日常生活から考えると、中国政治を一党支配との視点のみから捉えてよいのか。経済格差の拡大、集団抗議の多発など、確かにさまざまな社会問題が顕在化しているが、生活の便利さと快楽に満足し、家族の健康や個人の出世といった日常的な問題にしか関心を持っていない市民が大半であるように思われる。彼らの心性や行動規範を抜きにしては、中国政治を理解することはできないだろう。

生活者の視点は、生の人間を理解する視点ともいえる。下記の写真は、昨年12月に広州の林則徐記念公園で撮ったものである。1839年に広東省でアヘン取り締まり運動を行った林則徐は愛国者としてよく知られている人物であるが、この公園を訪れる観光客は少なく、スポーツや麻雀といった娯楽活動を楽しむ常連の年輩者が多い。彼らは毎日、この公園を利用しているが、林則徐の「愛国」の歴史は彼らの生活にとって遠いものである。私がこの公園に来るために利用したタクシーの運転手さえも、林則徐とは誰か、知らなかったようである。他方、日常生活の世界は決して政治とは無縁なものであるとはいえない。中国社会の現実にはむしろその逆であり、いたるところに政治の匂いがする。バスの停留所、地下鉄の駅前などで「社会主義核心价值」といった政治宣伝に関する掲示が貼られており、テレビやニュースの中にも党の指導方針に関する宣伝が行われている。上から提唱される政治理念を民衆はどのように理解し、実行しているのか。これが私にとっていま一番興味深い問題である。



広州市林則徐記念公園の林則徐の石像



娯楽を楽しむ市民

談話室

教員によるエッセイコーナー